

過剰適応傾向とソーシャルサポートの関連性についての日中比較

—サポート期待とサポート受領および両者のズレに焦点を当てて—

王 暁*

本研究では、日中両国の過剰適応とサポート受領・期待・ズレとの関係を明らかにすることを目的とした。315名の日本人中学生と350名の中国人中学生を対象に調査を行った結果、①日中とも過剰適応傾向の高い群は日常場面で受けているサポート量が適応群より少なく、周りからのサポートに対する期待も低いことが明らかになった。②両国の相違点については、中国の過剰適応傾向者がサポート期待はサポート受領より高く、期待に満たさない受領ということが示された。日本の過剰適応傾向者がサポート受領に対してサポート期待はやや低いことが示唆された。

キーワード：過剰適応，ソーシャルサポート，日中比較

I. 問題と目的

現在、日本の教育領域において、児童生徒の心理的な健康状態の低下が見られるという状況が存在している。『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』（文部科学省，2014）によれば、平成24年度の中学校の不登校生徒数は91,446人であり、全生徒数から見た不登校生の割合は2.56%であった。また、不登校の子どもは小学6年生から中学校1年生にかけて約14,200人増加し、同様に中学1年生から3年生にかけて約15,000人増えている。このように、特に思春期における不登校の児童生徒は、相当数が存在している。河野(2003)は、不登校に陥った女子中学生が、同性の友人とは無理して気を遣って付き合い、大切な人や側にいてほしい人のために我慢をしてきた事例を報告している。益子(2012)は、不登校生徒の一群に共通する傾向として、「他者に気を遣って、他者の都合を優先し、自分の言いたいことを我慢する」という「過剰適応」傾向があるが指摘している。一方、不登校に至らずとも問題を抱えている児童生徒は多い。石津・安保(2008)によれば、過剰適応傾向の高い者は、保たれている社会的適応の陰で個人的な苦悩を感じている可能性や、個人の苦悩の一方で保護者をはじめとする環境側からは「適応できている」と評価される可能性が指摘され、その点において非適応的であることがわかってきている。近年、過剰適応の問題は、心理的側面における様々な不適応を導く危険因子と捉えられており、抑うつ傾向(石津・安保・大野，2007；加藤・神山・佐藤，2011；益子，2009b)、本来感の低下(益子，2009a，2010，2013)、ストレス反

*教育学研究科 博士課程後期

応(加藤他, 2011)などさまざまな不適応との関連が示されている。すなわち、過剰適応傾向の高い者は将来的に不適応に陥る可能性が高いと考えられる。

一方、中国の社会文化では、面子が非常に重要視されている。面子とは社会の枠組みの中で他者に認識してほしい公的な自己イメージである(末田, 1993)。自分と他者の面子を守るために、自分の権利や利害を主張せず、他者から相応しいと認められる行動を行いやすい。また、一人っ子政策により学歴競争に拍車がかかり、中国の親が子どもにかかる期待が高い。子どもが自分の考えを抑えて親が選ぶ進路へ進まなければならない(王, 2015)。このように、他人からの評価を重要だと考えているため、過剰適応行動を起こす可能性が高いであろう。王(2015)によれば、中国の過剰適応傾向者は全体と比較するとストレス反応が高く、ストレスサーに対してコントロール可能性と問題解決対処が低い傾向であることが示唆された。

ところで、児童生徒の学校不適応を緩衝する要因として、ソーシャルサポートが取り上げられている(石津・安保, 2010)。「ソーシャルサポート」は、ある人を取り巻く重要な他者(家族、友人、同僚、専門家など)から得られるさまざまな形の援助(support)であり、その人の健康維持・増進に重大な役割を果たす概念である(久田, 1987)。岡安・嶋田・坂野(1993)は、男子より女子の方がサポートによる軽減効果が見られることや、友人より家族からのサポートがストレス反応に重要であることを指摘している。また、菊島(1999)は、ソーシャルサポートが不登校傾向に影響を与えるストレスサーを軽減することを見出している。このように、ソーシャルサポートが生活上のネガティブな出来事を緩衝し、人の心身の健康が損なわれるのを防ぐ効果があると考えられてきた。

しかし、援助行動に関する社会心理学的研究では、他者から援助を受けることは、必ずしも心身の健康にポジティブな影響を与えているだけではない。福岡(2003)がパーソナリティとしての他者依存性とソーシャルサポートに関する認知との関連を検討している。その結果、他者依存性の強い人は、そうでない人とサポートの入手可能性(知覚されたサポート)では差がないにもかかわらず、多くのサポートを求める一方で現在のサポートに対する満足度は低く、さらに実際にサポートを受けることに対しては心理的な抵抗感が強いことが示されている。石津・安保(2010)が、過剰適応傾向者は知覚されたサポートは全体と比較しても低いものではなかったが学校ざらい感情が高いことを指摘している。したがって、過剰適応傾向に対して知覚されたサポートをより効果的に活用するために、過剰適応者が実際に周囲の人からのサポートがどのくらい受け取っているか、またどんなサポートを期待しているかを検討する必要がある。

一方、実行されたサポートの効果には対人関係の質が関与することが従来の研究でたびたび指摘されている。たとえば、橋本(2005)は、受け手に評価懸念がある場合、サポートが機能しない可能性があるという指摘している。また、藤橋(2012)は、家族や友人以外の人から一人でも情緒的に頼れる人がいる場合は、過去に過剰適応行動を行っていても自己不全感の高まりを抑えられる可能性を示唆した。一方、中村・浦(1999)が、ストレス経験の頻度が低い場合、過剰なサポート受容は適応および自尊心に悪影響を与える可能性を指摘した。これらの報告から、過剰適応者に関するサポート研究に、サポート提供者との関係の視点を含めることが重要であると考えられる。

また、細田・田嶋(2009)の研究によれば、中学生の自己と他者への肯定感に周囲からのソーシャルサポートの内容が関連することが示された。細田ら(2009)は、中学生では自他への肯定感の得点が高い者が親子間や友人間での共行動的サポートの得点が高いことを明らかにし、その有効性を指摘している。藤本・水野(2014)の研究によれば、教師魅力が中学生の学校の楽しさに対してよい影響を与える一方で、教師からの情緒的サポートは学校の楽しさを軽減してしまう可能性も示唆された。これまでの先行研究から、求めるサポートのタイプと与えられるサポートのタイプとの一致の程度が低い場合より高い場合の方が、サポートの有効性は高くなる(浦, 1998)ことが明らかになっている。したがって、サポートが多ければ良いというものではなく、必要な時に望む相手から望むサポートが得られるか、あるいはサポートを求めることができるかが重要である(細田・田嶋, 2009)。

以上を踏まえて、本研究では、サポート受領、期待を、サポート源とサポート内容の2点で捉え、日中両国の中学生を対象に、サポート期待と受領のズレの視点を含め、過剰適応傾向とソーシャルサポートとの関連を検討する。また、その結果について日中比較を行い、過剰適応者のソーシャルサポートに関する異同を見出すことを目的とする。

Ⅱ. 方 法

調査協力者

中国 A 市の公立中学校一校と日本 B 市の公立中学校2校の生徒に質問紙調査を実施した。回答に不備のあった者を除外した中国側の調査協力者は男子188名、女子162名、合計350名、日本側の調査協力者は男子149名、女子166名、合計315名を分析の対象とした。また、中国側の学年別人数は1年生103名、2年生が134名、3年生が113名であった。日本側の学年別人数は1年生91名、2年生90名、3年生134名であった。

調査時期

中国での調査は2015年9月下旬に、日本での調査は2015年12月の中旬に行った。

調査の手続き

調査票を用いた質問紙調査を無記名で実施した。教室内での一斉実施であり、実施にあたってはクラス担任に協力を依頼した。調査票は回答者である生徒自身によって、封筒に入れ密封した状態で提出してもらい、匿名性の保持に努めた。

倫理的配慮

調査の趣旨を記した依頼書を中学校校長宛に送付し、協力の同意を得た。調査票には学校の先生が回答を見ることはないこと、成績等にも関係のないことを明記し、回答する上での不安を低減させるよう配慮した。本研究の実施に当たっては、東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会

からの承認を得た上で実施した(承認ID:15-1-017)。

調査内容

調査票は、以下の測度から構成された。

1) フェイスシート

学年、性別を尋ねた。学校の先生が回答を見ることはないこと、成績等にも関係のないことを明記し、回答する上での不安を低減させるよう配慮した。

2) 中学生用過剰適応尺度

石津(2006)が作成した中学生用過剰適応尺度を用いた。心理的な適応感に関する「自己不全感」6項目、「自己抑制」7項目と、行動的特徴に関する「他者配慮」8項目、「期待に沿う努力」7項目、「人からよく思われたい欲求」5項目の5因子計33項目からなる。原版に準拠し、「以下の質問に対して、自分にもっともあてはまると思う番号に○をつけてください」と教示し、5件法で回答を求めた。中国側の質問紙には、王(2015)が翻訳した中国語版の過剰適応尺度を使用した。

3) ソーシャルサポート受領尺度

細田・田嶋(2009)が作成したソーシャルサポート尺度である「道具的サポート」6項目、「情緒的サポート」4項目、「共行動サポート」5項目の3因子計15項目を使用した。親、友だち、先生に対して、質問内容が普段どのくらいありますかという頻度について、「ほとんどない=1点」～「よくある=4点」までの4件法で回答を求めた。

4) ソーシャルサポート期待尺度

細田・田嶋(2009)によって作成されたソーシャルサポート尺度を一部改変して用いた。尺度を改変して用いることについて、開発者の細田から了承を得ている。なお、「ソーシャルサポート受領尺度」と「ソーシャルサポート期待尺度」の2つ尺度は、受領と期待、及びこれらのズレを目的としている。

3)、4)の尺度の中国語版を作成するために、筆者と日本語に堪能な中国人留学生1人が尺度をそれぞれ中国語に翻訳した。その後、日本語原文を読んでいない別の滞日歴の長い中国人留学生1人が中国語に翻訳された尺度を日本語に再翻訳した。そして、再翻訳した日本版の項目内容について、日本人大学教員1人がバックトランスレーションを確認し、表現を修正した。

Ⅲ. 結果

1. 尺度に関する検討

1) 中学生用過剰適応尺度

日中比較のために、先行研究(石津, 2006; 王, 2015)の5因子構造に従い、日本と中国それぞれの α 係数を求めた(Table1)。中国側において、「人からよく思われたい欲求」という因子がやや低いが($\alpha=.64$)、ほかの因子はすべて.70以上であり、許容できる値となった。

2) サポート受領尺度

細田・田嶋(2009)が作成した「サポート受領尺度」が中国の中学生に対しても適用できるかどうかを調べるために、確認的因子分析を行った。各サポート源の適応度に関して、親 $GFI=.899$, $AGFI=.866$, $CFI=.868$, $RMSEA=.087$; 友だち $GFI=.899$, $AGFI=.860$, $CFI=.878$, $RMSEA=.079$; 先生 $GFI=.912$, $AGFI=.865$, $CFI=.925$, $RMSEA=.081$ の数値が得られ、ある程度モデルが当てはまることが確認でき、細田・田嶋(2009)の因子構造を採用することができるといえる。原尺度と同じ、3因子構造を採用し、「共行動的サポート」因子、「道具的サポート」因子と「情緒的サポート」因子とした。さらに、Cronbachの α 係数についても検討し、許容できる値が得られ、中国のデータにおいても、先行研究のこの因子構造において内的整合性が確認されたと考えられる (Table2)。

3) サポート期待尺度

「サポート受領尺度」と同じ、改変された「サポート期待尺度」に対して確認的因子分析を行い、適応度に関して、中国では、親： $GFI=.903$, $AGFI=.870$, $CFI=.889$, $RMSEA=.085$; 友だち： $GFI=.891$, $AGFI=.850$, $CFI=.882$, $RMSEA=.083$; 先生： $GFI=.890$, $AGFI=.831$, $CFI=.941$, $RMSEA=.092$ の数値が得られた。日本では、親： $GFI=.913$, $AGFI=.880$, $CFI=.961$, $RMSEA=.061$; 友だち： $GFI=.872$, $AGFI=.824$, $CFI=.927$, $RMSEA=.088$; 先生 $GFI=.873$, $AGFI=.805$, $CFI=.923$, $RMSEA=.090$ の値が得られ、ある程度モデルが当てはまるといえる。さらに、Cronbachの α 係数を求めたところ、中国側は.67以上、日本側は.75以上であり、3因子の因子構造である程度の信頼性が確認されたと考えられる (Table2)。

2. 日中両国の中学生におけるサポート期待と受領のズレの実態

サポート源別によるサポート期待と受領の差異を把握するために、各サポート源のサポート期待と受領のズレの得点を算出した (Table3)。

ズレの得点はサポート期待得点ーサポート受領得点とし、正の値はサポート期待>サポート受領、0点はサポート期待=サポート受領、負の値はサポート期待<サポート受領となる。

その結果について、中国では、各サポート源においてすべて正の値、日本ではすべての負の値となった。すなわち、中国の中学生は全般的にサポート期待が実際に受け取っているサポート量より多く、日本の中学生はサポート期待より実際に受け取っているサポートが多いことが示された。

Table1 日本と中国における過剰適応下位尺度の平均値、標準偏差と α 係数

	中国			日本		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>a</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>a</i>
自己抑制	18.82	6.07	.79	20.75	6.30	.87
自己不安全感	15.39	5.38	.76	18.37	5.57	.86
期待に沿う努力	25.47	5.23	.73	20.97	5.74	.79
他者配慮	29.69	5.37	.72	27.29	5.29	.78
人からよく思われたい欲求	17.59	3.79	.64	17.09	4.33	.80

Table2 日本と中国におけるサポート受領・期待の下位尺度ごとの平均値, 標準偏差と α 係数

			中国			日本		
			<i>M</i>	<i>SD</i>	α	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
サポート受領	親	共行動的	14.07	3.65	.75	15.02	4.04	.81
		道具的	18.68	3.33	.66	17.51	4.55	.82
		情緒的	11.03	3.34	.82	11.26	3.59	.87
	友だち	共行動的	17.04	2.70	.67	17.21	3.02	.76
		道具的	18.42	3.67	.72	17.20	4.19	.78
		情緒的	12.43	2.89	.76	11.64	3.37	.85
	先生	共行動的	11.12	4.00	.82	9.86	3.31	.76
		道具的	18.28	3.29	.69	15.76	4.45	.82
		情緒的	10.88	3.28	.80	9.14	3.48	.87
サポート期待	親	共行動的	16.72	3.22	.75	12.94	4.59	.85
		道具的	19.92	3.76	.79	15.04	5.12	.86
		情緒的	13.74	2.62	.78	10.28	3.79	.85
	友だち	共行動的	18.14	2.38	.67	15.63	4.27	.88
		道具的	20.81	3.21	.74	15.93	4.93	.85
		情緒的	13.91	2.43	.75	10.80	3.76	.87
	先生	共行動的	14.57	4.25	.86	9.02	3.48	.79
		道具的	19.76	3.77	.80	14.07	4.98	.87
		情緒的	12.97	2.95	.80	8.30	3.60	.87

Table3 日本と中国におけるサポートズレの下位尺度ごとの平均値・標準偏差

			中国		日本	
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
親	共行動的		2.65	3.58	-2.08	3.91
	道具的		1.24	3.68	-2.48	4.66
	情緒的		2.71	3.20	-0.98	3.58
友だち	共行動的		1.10	2.09	-1.57	3.72
	道具的		2.39	3.14	-1.27	4.34
	情緒的		1.48	2.36	-0.85	3.19
先生	共行動的		3.45	3.68	-0.84	2.26
	道具的		1.48	3.09	-1.68	3.55
	情緒的		2.09	2.89	-0.84	2.53

次に, 石津・安保 (2007; 2008; 2010) にならい, 過剰適応尺の下位尺度の組み合わせパターンからより個人的な特徴を特定するために, 日中データを合わせ, 5つの下位尺度得点について k-means 法によるクラスタ分析を行った。その結果, 各クラスタに含まれる人数およびクラスタの解釈の可

能性から4クラスタによる分類を採用した。

クラスタを独立変数、標準化後の過剰適応尺度の5因子(自己不全感、自己抑制、他者配慮、期待に沿う努力、人からよく思われたい欲求)を従属変数に、一要因5水準の分散分析を行った(Table4)。すべての従属変数においてクラスタの効果が有意であったため、Tukey法による多重比較を行った。その結果、自己抑制、自己不全感において、クラスタ3、クラスタ4、クラスタ1、クラスタ2の順に得点が低かった($F(3,664) = 358.14, p < .001$; $F(3,664) = 198.36, p < .001$)。期待に沿う努力において、クラスタ1とクラスタ3がクラスタ4とクラスタ2より得点が高く、クラスタ4が最も低かった($F(3,664) = 314.54, p < .001$)。他者配慮と人からよく思われたい欲求において、クラスタ1、クラスタ3、クラスタ2、クラスタ4の順に得点が高かった($F(3,664) = 212.59, p < .001$; $F(3,664) = 174.70, p < .001$)。各クラスタの特徴が以下に記す(Figure1)。

次に、クラスタの特徴を明らかにし、クラスタの命名をするために、上記で分類したクラスタごとに、自己不全感、自己抑制、他者配慮、期待に沿う努力、人からよく思われたい欲求の平均点を求めた(Table5, Figure2)。

Table5, Figure2を参考に、平均値3.2以上をクラスタの特徴として、4つのクラスタの特徴を記述する。クラスタ1は、すべての下位尺度が平均値3.2を超えていたため、「過剰適応群」と命名した。

Table4 各クラスタの過剰適応の値

	cl1 (n=154)		cl2 (n=167)		cl3 (n=202)		cl4 (n=142)		F 値(3,557)	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
自己抑制	-.54	.59	-.84	.63	1.18	.59	.51	.62	358.14***	cl1>2>3>4
自己不全感	-.32	.79	-.92	.62	.97	.75	.49	.63	198.36***	cl1>2>3>4
期待に沿う努力	.62	.63	-1.11	.78	.64	.59	-.41	.69	314.54***	cl1, 3>2>4
他者配慮	.49	.71	-.99	.80	.79	.63	-.50	.66	212.59***	cl1>3>2>4
人からよく思われたい欲求	.42	.65	-.94	.97	.73	.71	-.38	.72	174.70***	cl1>3>2>4

*** $p < .001$

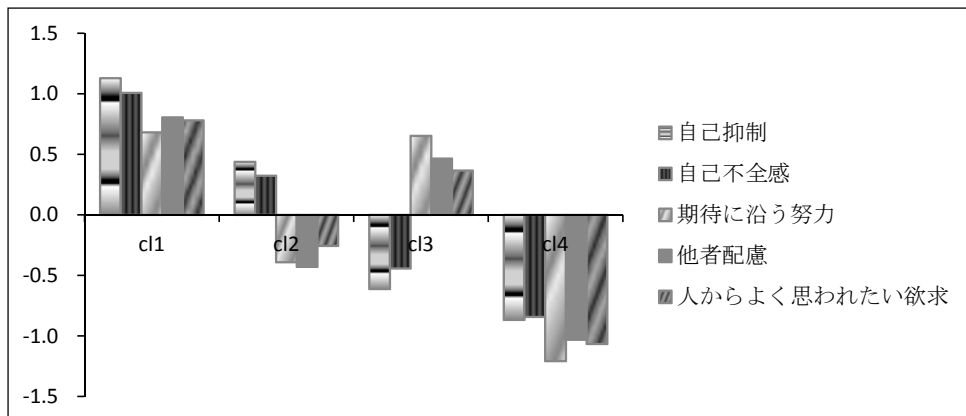


Figure1 各クラスタの過剰適応の標準化得点

Table5 各クラスターの過剰適応の平均値

	cl1 (n=154)		cl2 (n=167)		cl3 (n=202)		cl4 (n=142)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
自己抑制	3.83	.56	3.21	.55	2.27	.55	2.04	.56
自己不全感	3.75	.68	3.11	.62	2.38	.76	2.00	.66
期待に沿う努力	3.91	.51	3.00	.54	3.89	.53	2.31	.60
他者配慮	4.12	.44	3.28	.43	3.89	.50	2.86	.57
人からよく思われたい欲求	4.11	.57	3.26	.58	3.77	.53	2.61	.76

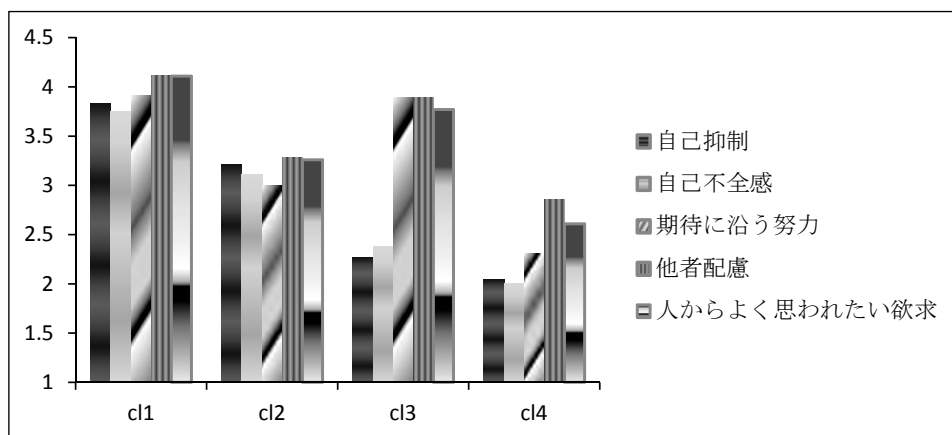


Figure2 各クラスターの過剰適応平均得点

クラスター2は、各因子の標準化得点が±0.5程度で平均値も特に特徴がみられなかったため、「平均群」と命名した。クラスター3は、「自己抑制」と「自己不全感」が全体の平均値を下回って、「期待に沿う努力」、「他者配慮」と「人からよく思われたい欲求」が全体の平均値3.2を超えていたため、「適応群」と命名した。クラスター4はすべての下位尺度が平均値を下回っているため、「奔放群」と命名した。

各クラスターとサポートとの関連を検討するために、各サポート源のサポート受領・期待・ズレを従属変数とし、国・クラスター群を独立変数とした2要因分散分析を行った (Table6, Table7, Table8)。

(1)過剰適応とサポート受領との関連

過剰適応とサポート受領との関連を検討するために、各サポート源(親, 友だち, 先生)の3因子「共行動的」、「道具的」、「情緒的」の各クラスター群の平均値と標準偏差を算出し、2要因分散分析を行った (Table6)。

その結果、「親道具的」、「友だち道具的」、「友だち情緒的」以外、いずれの因子において国の主効果が見られた。日本のサンプルは「親共行動的」($F(1,657) = 19.90, p < .001$)、「親情緒的」($F(1,657) = 7.43, p < .01$)、「友だち共行動的」($F(1,657) = 7.31, p < .01$)において高い値を示し、中国のサンプル

ルは「先生共行動的」($F(1,657) = 6.09, p < .05$), 「先生道具的」($F(1,657) = 34.22, p < .001$), 「先生情緒的」($F(1,657) = 18.14, p < .001$)において高い値を示した。

クラスターの群の主効果については、すべての因子において有意差が見られた。「親共行動的」($F(3,657) = 4.69, p < .01$), クラスター3の得点がクラスター2より有意に高かった。「親道具的」($F(3,657) = 7.59, p < .001$), 「友だち道具的」($F(3,657) = 8.42, p < .001$), 「友だち情緒的」($F(3,657) = 7.63, p < .001$), 「先生道具的」($F(3,657) = 8.18, p < .001$)において、クラスター3が最も高く、クラスター2が最も低く、クラスター1とクラスター4では有意な差が認められなかった。「親情緒的」($F(3,657) = 8.02, p < .001$), 「友だち共行動的」($F(3,657) = 8.17, p < .001$), 「先生共行動的」($F(3,657) = 7.60, p < .001$)において、クラスター3がクラスター1とクラスター2より得点が有意に高く、クラスター4の得点がクラスター2より有意に高かった。「先生情緒的」($F(3,657) = 8.56, p < .001$)において、クラスター3の得点がほかの群より高く、クラスター1, クラスター2とクラスター4では有意差が見られなかった。いずれの因子においても交互作用は見られなかった。

(2) 過剰適応とサポート期待との関連

過剰適応とサポート期待との関連を検討するために、各サポート源(親, 友だち, 先生)の3因子「共行動的」, 「道具的」, 「情緒的」の各クラスター群の平均値と標準偏差を算出し、2要因分散分析を行った(Table7)。

その結果、すべての因子において国の主効果が見られ、いずれも中国の得点が日本より有意に高かった(F 親共行動的(1,657) = 93.39, $p < .001$; F 親道具的(1,657) = 122.08, $p < .001$; F 親情緒的(1,657) = 112.22, $p < .001$; F 友だち共行動的(1,657) = 45.16, $p < .001$; F 友だち道具的(1,657) = 140.95, $p < .001$; F 友だち情緒的(1,657) = 90.69, $p < .001$; F 先生共行動的(1,657) = 226.26, $p < .001$; F 先生道具的(1,657) = 180.99, $p < .001$; F 先生情緒的(1,657) = 228.70, $p < .001$)。

クラスターの群の主効果については、「親道具的」($F(1,657) = 122.08, p < .001$)において、クラスター3の得点が最も高く、クラスター2とクラスター4がクラスター1とクラスター3より有意に得点が低く、クラスター2とクラスター4では有意差が認められなかった。ほかの因子について、クラスター3の得点が最も高く、クラスター2の得点が最も低く、クラスター1とクラスター4では有意に差が見られなかった(F 親共行動的(3,657) = 6.76, $p < .001$; F 親情緒的(3,657) = 11.76, $p < .001$; F 友だち共行動的(3,657) = 9.43, $p < .001$; F 友だち道具的(3,657) = 13.77, $p < .001$; F 友だち情緒的(3,657) = 14.08, $p < .001$; F 先生共行動的(3,657) = 7.33, $p < .001$; F 先生道具的(3,657) = 9.82, $p < .001$; F 先生情緒的(3,657) = 7.96, $p < .001$;)。

いずれの因子においても交互作用は見られなかった。

(3) 過剰適応とサポートズレとの関連

過剰適応とサポートズレとの関連を検討するために、各サポート源(親, 友だち, 先生)の3因子「共行動的」, 「道具的」, 「情緒的」の各クラスター群の平均値と標準偏差を算出し、2要因分散分析を行っ

た (Table8)。

国の主効果については、すべての因子において、中国のほうが有意に高かった (F 親共行動的 (1,657) =212.86, $p<.001$; F 親 道 具 的 (1,657) =102.85, $p<.001$; F 親 情 緒 的 (1,657) =162.25, $p<.001$; F 友だち共行動的 (1,657) =102.12, $p<.001$; F 友だち道具的 (1,657) =119.37, $p<.001$; F 友だち情緒的 (1,657) =85.72, $p<.001$; F 先生共行動的 (1,657) =251.33, $p<.001$; F 先生道具的 (1,657) =113.55, $p<.001$; F 先生情緒的 (1,657) =161.10, $p<.001$)。

クラスターの群の主効果については、「友だち共行動的」と「先生道具的」以外、いずれの因子において、クラスター1とクラスター3はクラスター2とクラスター4よりも有意に得点が高かった (F 親共行動的 (3,657) =3.50, $p<.05$; F 親道具的 (3,657) =5.11, $p<.01$; F 親情緒的 (3,657) =5.48, $p<.01$; F 友だち道具的 (3,657) =3.20, $p<.05$; F 友だち情緒的 (3,657) =6.44, $p<.001$; F 先生共行動的 (3,657) =3.13, $p<.05$; F 先生情緒的 (3,657) =2.95, $p<.05$)。

いずれの因子においても交互作用は見られなかった。

Table6 各クラスターのサポート受領の得点と分散分析の結果

	クラスター1		クラスター2		クラスター3		クラスター4		主効果 国 F 値	クラスター F 値	交互作用 F 値	
	日本 74	中国 80	日本 121	中国 46	日本 42	中国 160	日本 78	中国 64				
親	共行動的	15.05 4.14	13.16 3.81	14.36 3.85	12.96 3.36	15.52 4.52	14.91 3.47	15.75 3.85	13.94 3.66	19.90*** 日>中	4.69** 3>2	n.s.
	道具的	17.38 4.69	17.98 3.65	16.79 4.39	17.15 3.54	18.74 4.80	19.58 2.81	18.10 4.39	18.41 3.38	2.54	7.59*** 3>1, 4>2	n.s.
	情緒的	10.92 3.77	10.23 3.54	10.76 3.45	9.52 3.32	12.02 3.87	11.93 2.94	11.96 3.35	10.86 3.44	7.43** 日>中	8.02*** 3>1, 2,4>2	n.s.
友だち	共行動的	17.18 2.83	16.63 3.37	16.50 3.07	15.91 2.61	18.01 2.91	17.65 2.16	17.89 2.95	16.83 2.71	7.31** 日>中	8.17*** 3>1, 2,4>2	n.s.
	道具的	17.35 4.11	17.93 4.02	16.16 3.96	16.54 3.53	17.67 4.44	19.39 3.24	18.41 4.14	17.98 3.67	3.03	8.42*** 3>1, 4>2	n.s.
	情緒的	11.73 3.60	12.09 3.05	10.70 3.01	11.33 3.02	12.31 3.80	13.06 2.64	12.67 3.07	12.09 2.89	1.26	7.63*** 3>1, 4>2	n.s.
先生	共行動的	9.84 3.45	10.24 3.77	8.99 2.78	10.02 3.67	10.95 3.44	11.76 4.12	10.63 3.56	11.42 3.89	6.09* 中>日	7.60*** 3>1, 2,4>2	n.s.
	道具的	16.53 4.14	17.59 3.70	14.46 4.12	17.00 3.17	16.93 4.49	19.01 2.84	16.40 4.80	18.23 3.49	34.22*** 中>日	8.18*** 3>1, 4>2	n.s.
	情緒的	9.27 3.33	9.93 3.33	8.22 3.02	10.04 3.29	10.47 3.63	11.59 3.16	9.74 3.85	10.91 3.15	18.14*** 中>日	8.56*** 3>1, 2, 4	n.s.

上段: 平均値 下段: 標準偏差 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table7 各クラスターのサポート期待の得点と分散分析の結果

		クラスタ1		クラスタ2		クラスタ3		クラスタ4		主効果 国 F値	クラスタ F値	交互 作用 F値
		日本 74	中国 80	日本 121	中国 46	日本 42	中国 160	日本 78	中国 64			
親	共行動的	13.69 4.82	16.65 3.26	11.76 4.22	15.87 3.10	14.36 4.43	17.34 2.96	13.30 4.65	15.86 3.59	93.39*** 中>日	6.76*** 3>1, 4>2	n.s.
	道具的	15.93 4.80	19.95 3.71	13.99 4.80	18.61 3.80	17.02 4.97	20.81 3.32	14.74 5.59	18.63 4.23	122.08*** 中>日	10.19*** 3>1>2, 4	n.s.
	情緒的	10.91 3.50	13.58 2.65	9.45 3.77	12.67 2.87	11.98 3.47	14.43 2.23	10.07 3.89	13.00 2.86	112.22*** 中>日	11.76*** 3>1, 4>2	n.s.
友だち	共行動的	16.29 4.21	18.10 2.74	14.47 4.29	16.91 2.77	16.89 3.42	18.68 1.70	16.14 4.38	17.67 2.66	45.16*** 中>日	9.43*** 3>1, 4>2	n.s.
	道具的	16.69 4.96	20.79 3.28	14.56 4.65	18.76 3.66	17.83 4.50	21.63 2.62	16.30 5.08	20.25 3.41	140.95*** 中>日	13.77*** 3>1, 4>2	n.s.
	情緒的	11.50 3.76	13.98 2.28	9.69 3.55	12.83 2.59	12.58 3.56	14.51 2.00	10.88 3.69	13.11 2.99	90.69*** 中>日	14.08*** 3>1, 4>2	n.s.
先生	共行動的	9.27 3.79	14.25 4.52	8.22 3.08	12.83 3.97	9.94 3.56	15.50 3.79	9.51 3.55	13.89 4.68	226.26*** 中>日	7.33*** 3>1, 4>2	n.s.
	道具的	15.16 5.06	19.35 4.03	12.70 4.44	17.93 4.04	15.45 5.05	20.71 3.06	14.42 5.23	19.22 4.24	180.99*** 中>日	9.82*** 3>1, 4>2	n.s.
	情緒的	8.86 3.69	12.63 3.27	7.37 3.22	12.02 2.78	9.64 3.82	13.58 2.61	8.50 3.64	12.59 3.22	228.70*** 中>日	7.96*** 3>1, 4>2	n.s.

上段：平均値 下段：標準偏差 *** $p<.001$

Table8 各クラスターのサポートズレの得点と分散分析の結果

		クラスタ1		クラスタ2		クラスタ3		クラスタ4		主効果 国 F値	クラスタ F値	交互 作用 F値
		日本 74	中国 80	日本 121	中国 46	日本 42	中国 160	日本 78	中国 64			
親	共行動的	-1.36 4.38	3.49 3.68	-2.60 3.88	2.91 3.87	-1.17 3.96	2.44 3.55	-2.45 3.30	1.92 3.12	212.86*** 中>日	3.50* 1, 3>2, 4	n.s.
	道具的	-1.45 4.98	1.98 4.07	-2.80 4.65	1.46 4.26	-1.71 4.46	1.23 3.26	-3.36 4.30	0.22 3.54	102.85*** 中>日	5.11** 1, 3>2, 4	n.s.
	情緒的	-0.01 3.88	3.35 3.45	-1.31 3.31	3.15 3.48	-0.05 3.84	2.50 3.07	-1.88 3.25	2.14 2.84	162.25*** 中>日	5.48** 3>2, 4	n.s.
友だち	共行動的	-0.89 3.76	1.48 2.70	-2.04 3.92	1.00 2.04	-1.12 3.42	1.03 1.82	-1.74 3.43	0.84 1.84	102.12*** 中>日	2.36	n.s.
	道具的	-0.66 4.67	2.86 3.58	-1.60 4.28	2.22 3.34	0.17 3.51	2.24 2.82	-2.12 4.30	2.27 3.19	119.37*** >日	3.20* 3>2, 4	n.s.
	情緒的	-0.23 3.33	1.89 2.52	-1.01 2.99	1.50 2.11	0.27 3.39	1.44 2.39	-1.78 2.97	1.02 2.20	85.72*** 中>日	6.44*** 1, 3>2, 4	n.s.
先生	共行動的	-0.56 2.21	4.01 3.66	-0.77 1.85	2.80 3.24	-1.01 2.57	3.74 3.56	-1.12 2.68	2.47 4.12	251.33*** 中>日	3.13* 1, 3>2, 4	n.s.
	道具的	-1.36 3.79	1.76 3.12	-1.76 3.23	0.93 3.04	-1.48 3.88	1.70 3.05	-1.97 3.65	0.98 3.12	113.55*** 中>日	1.63	n.s.
	情緒的	-0.41 2.55	2.70 3.20	-0.85 2.14	1.98 2.80	-0.82 3.01	1.99 2.82	-1.24 2.76	1.69 3.22	161.10*** 中>日	2.95* 1, 3>2, 4	n.s.

上段：平均値 下段：標準偏差 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

IV. 考 察

本研究の目的は、日中両国の中学生を対象に、日中のサポートの実態を明らかにしつつ過剰適応の観点から、両国の特徴と差異を明らかにすることであった。

サポート受領に関しては、「親共行動的」、「親情緒的」、「友だち共行動的」において、日本の中学生が中国の中学生より高かった。「先生共行動的」、「先生道具的」、「先生情緒的」において、中国のほうが高かった。すなわち、日本の中学生と比べ、中国の中学生は親や友だちと一緒に遊んだり、話しあったりするなど共行動的サポートや、親から情緒面の関心や励ましが少なく、先生からの様々なサポートが多いことが示唆された。多くの研究によれば(侯, 2002; 朱, 2012)、中国における中学生の親は過干渉(支配的)・拒否的養育態度になる傾向が高いことが指摘されている。一人っ子政策により、中国の親は自分の夢をすべて子どもにかけるため、子どもの出世だけをねらい、勉強面以外に拒絶する傾向がある(朱, 2012)。一方、日本の中学校では部活動が盛んで、日本の中学生が友だちと付き合っている時間が長いことに対して、中国の中学生は学校の勉強時間が長く、教師との接触時間が日本よりも多く(王, 2010)、教師とのかかわりが多いため、友だちより先生から様々なサポートを受け取る傾向があると考えられる。

また、クラスタ群の比較によって、過剰適応傾向者が適応者よりまわりから実際に受けているサポートが少ないことが明らかになった。福岡(2015)によれば、他者依存性が高い者は社会スキルの不足によって、サポートが必要な事態においてもそれに対応した行動ができないことからくる、実際のサポート量の低さを反映していると指摘された。したがって、他者志向的である過剰適応傾向の高い者は、適切に援助要請できない辛さを抱えている可能性が示唆された。

サポート期待に関しては、いずれのサポート源においても、中国の中学生が各対象に対するサポート期待が日本より高かった。中国では1980年代から正式に実施され始めた「一人っ子」政策などの社会環境から、子どものことは家族の中で何ごとにも優先され、大切に扱われ、身の回りのことはほとんど親が世話をするということになる(侯, 2002)。そうした環境では子どもは自立が遅れ、自分にストレスが生じたときに周りの人に対する支援の欲求も高いと考えられる。また、本研究で過剰適応傾向群が適応群よりサポート期待が低いことが示された。福岡(1998)の報告では、社会の場面で自信がなく他者に頼りたい、頼らねばやっていけないという気持ちを慢性的に強く持っている人では、周囲の他者からサポートが得られるとしても、それは当人にとって心理的苦痛を防ぐようなポジティブな効果をもつものではなく、さらには生活の中で何らかのネガティブな出来事を経験するとその悪影響を容易に受けてしまうことが指摘された。すなわち、過剰適応者にとって実際の援助は本来の肯定的な機能を果たさず、逆に否定的に機能する事態を招く可能性がある。このように、ストレスを感じる際にも他人からの援助に対する期待が低下すると考えられる。また、過剰適応傾向者はサポートに対して、心理的負債を強く感じるとの記述(小澤・下斗米, 2013)を踏まえると、過剰適応傾向がある者は被援助に対する懸念があるため、サポートを申し込むことに抵抗感をもつ可能性が考えられる。

サポートズレに関しては、すべての対象のサポートズレが中国のほうが高く、過剰適応傾向者と

適応者では有意な差が見られなかった。日本の中学生では期待より実際に受けているサポート量が高かったが、中国の中学生では期待より実際に受けているサポート量が少ないことから、このズレは、前述した通り、中国の子どもたちの周囲に対する高い期待に由来すると思われる。また、長い間中国国内では子どもの心理状態といった側面に保護者や養育者の意識も乏しく、目を向けてこなかったという現状がある(鉄拳, 2013)ため、中国の中学生が実際に受け取っているサポートが少なく、予め抱いた期待を満たさないことが示唆された。

日中間の過剰適応傾向者の異同については、日中とも過剰適応傾向の高い群は日常場面で受けているサポート量が適応群より少なく、周りからのサポートに対する期待も低いことが明らかになった。両国の異なる点については、中国の過剰適応傾向者がサポート期待はサポート受領より高く、期待を満たさない受領という実態が示された。日本の過剰適応傾向者がサポート受領に対してサポート期待はやや低いことが示唆された。

本研究の課題として、本研究では性差と学年差によるソーシャルサポートの違いについて検討できなかつた点が挙げられる。ソーシャルサポートに関する先行研究では、友人からのサポートにおいて男子より女子の得点が高いという知見があり(Buhrmester & Furman, 1987)、また教師からの道具的サポートおよび共行動的サポートにおいては3年生が他の学年より得点が高い傾向が指摘されている(細田ら, 2009)。これらの知見を踏まえ、今後過剰適応傾向者のソーシャルサポートに関して性差と学年差の観点からも検討する必要があるだろう。また、石津ら(2010)が指摘する過剰適応はサポート量とその効果を区別して考える必要性があることによって、今後こうした視点を取り入れ、日中両国の過剰適応者に対して、どのようなサポートがどんな場面により有効的な働きをしているかについて探っていく必要があると考えられる。

【引用文献】

- Buhrmester, D., & Furman, W. 1987 The development of companionship and intimacy. *Child Development*, 58, 1101-1113.
- 福岡欣治 1998 依存的な人にとってのソーシャル・サポートの限界：他者依存性と知覚されたサポートの効果に関する基礎的研究 静岡県立大学短期大学部研究記要, 12(3).
- 福岡欣治 2003 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャル・サポートの影響 対人社会心理学研究, 3, 9-14.
- 福岡欣治 2015 他者依存性とソーシャル・サポートが心理的健康に及ぼす影響：大学生の友人関係における実際のサポート授受に注目して 川崎医療福祉学会誌, 24(2), 201-207.
- 藤橋真梨奈 2012 過去の過剰適応行動が現在の自己不全感に及ぼす影響—媒介要因・緩衝因子を含めた検討— 臨床発達心理学研究, 11, 40-53.
- 藤本到・水野治久 2014 中学生の学校への登校維持要因—教師に対する信頼感・ソーシャルサポート・被援助志向性からの検討— 大阪教育大学紀要, 62(2), 119-129.
- 橋本剛 2005 対人関係に支えられる 和田実(編著)男と女の対人心理学 北大路書房, 137-158.
- 久田満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179.
- 細田絢・田嶋誠一 2009 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究 教育心理学研究, 57,

309-323.

- 侯桂芳 2002 中国における一人っ子青年の性格特性と認知された親の養育態度 性格心理学研究, 10(2), 85-97.
- 石津憲一郎 2006 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 137.
- 石津憲一郎・安保英勇・大野陽子 2007 過剰適応研究の動向と課題—学校場面における子どもの過剰適応— 学校心理学研究7(1), 47-54.
- 石津憲一郎・安保英勇 2008 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
- 石津憲一郎・安保英勇 2010 知覚されたソーシャルサポートと学校ざらい感情は常に関連するか—過剰適応の視点から—
- 加藤智子・神山貴弥・佐藤容子 2011 中学生の過剰適応傾向とストレス反応における影響モデルの検討 宮崎大学教育文化学部付属教育実践総合センター研究紀要, 19, 29-38.
- 菊島勝也 1999 ストレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 心理学研究, 7, 66-76.
- 河野莊子 2003 青年期事例における時間的展望の現れ方とその変化 不登校を主訴として来談した2事例をもとに 心理臨床学研究, 21, 374-385.
- 堀毛一也 1994 社会的スキルを測る 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也 編 社会的スキルの心理学 川島書店 168-176.
- 益子洋人 2009a 青年期における過剰適応傾向に関する研究—外的適応行動と自己価値の随伴性, 本来感との関連— カウンセリング研究, 41, 151-160.
- 益子洋人 2009b 高校生の過剰適応傾向と、抑うつ、強迫、対人恐怖心症、不登校傾向との関連—高等学校2校の調査から— 学校メンタルヘルス 12, 69-76.
- 益子洋人 2010 大学生の過剰適応外的適応行動と内省傾向が本来感に及ぼす影響 学校メンタルヘルス, 13, 19-26.
- 益子洋人 2012 青年期の過剰適応傾向の低減に関する研究—プログラム開発に向けた基礎的研究— 2012年度明治大学博士論文.
- 益子洋人 2013 大学生における統合的葛藤解決スキルと過剰適応との関連 教育心理学研究, 61, 133-145.
- 文部科学省 2014 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」等結果について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/1351936.htm
- 中村佳子・浦光博 1999 適応および自尊心に及ぼすサポートの期待と受容の交互作用効果 実験社会心理学研究, 39, 121-134.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育学心理学研究, 41(3), 302-312.
- 小澤拓大・下斗米淳 2013 過剰適応と実行されたサポートの関連—被援助志向性・心理的負債感からの検討— 日本社会心理学学会第54回大会発表論文集 328.
- 末田清子 1993 中国人がもつ面子の概念と日本人とのコミュニケーション 年報社会学論集, 6, 191-202.
- 末田清子 1995 「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い:中国人と日本人 ヒューマン・コミュニケーション研究 23, 1-14.
- 鉄拳 2013 中国と日本の中学生におけるストレスおよびストレス反応に関する比較検討 心理臨床学研究, 31(2), 211-222.
- 浦光博 1998 ソーシャル・サポートと対人関係 松井豊・浦光博(編)人を支える心の科学 誠信書房 177-206.

- 王松 2010 教師に対するイメージと心理的距離に関する日中比較研究—両親・友達との比較を通して— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4(1), 135-141.
- 王暁 2015 中学生の過剰適応に関する日中比較—性差, 学年差による検討およびストレス諸要因との関連— 東北大学平成26年度特定研究論文(未公刊).
- 朱英超 2012 中国の中学生が認知する親の養育態度とソーシャルスキルとの関連 九州大学心理学研究, 13, 125-135.

A Comparison of Relationship between Over-adaptation and Social Support in Japan and China:

Focusing on Expectation of Support, Receipt of Support and its Gap

Xiao WANG

(Graduated Student, Graduate school of Education, Tohoku University)

This study examined the relationship between over-adaptation and two variables: receipt of support and expectation of support, and the discrepancy between the two variables. 315 Japanese junior high school students and 350 Chinese junior high school students participated in this study. The results showed that (1) The person with the tendency of over-adaptation in both Japan and China received less support and had less expectation of social support in everyday life than adaptive people. (2) Country difference: Over-adaptive people in China tended to receive less support than what they expected. Meanwhile, over-adaptive people in Japan received more supported than what they expected.

Key words : Over-adaptation, Social support, Comparison of Japan and China